
まだ暗い道の途中

星海茅影

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まだ暗い道の途中

【Nコード】

N6430C

【作者名】

星海茅影

【あらすじ】

私自身の経験談です。かなり包み隠さずに書いていますのでちょっとどころじゃなく痛い話。

そもそもの始まり、地獄の始まり（前書き）

あらすじ通りイタイ表現ありますので、注意。

そもそもの始まり、地獄の始まり

私のまだ少ない過去の膨大ぼうだいで高濃度の記憶をまとめてみることにしました。

ただ、これを書こうと決めた夜。今まで無意識に本当はきつと自分でだけど、閉ざしていた過去の記憶の扉が開いてしまつて、扉の奥で当時の部屋で泣いてばかりいた私の記憶ややるせない感情、強烈な悔しさ・・・恨みと表現してもいいかもしれないようなものがどつと押し寄せてしまい、不安時に飲む精神安定剤を服用しなければ涙が止まらず眠れないところでした。

その翌朝も食欲が完全に消えてしまつて、無理して飲んだ牛乳も吐き出す始末。このままでは拒食症きしよくしやうになりかねないけど、これを書き終わればきつと症状は止まっているはず。

上の段でなんとなく分かつてしまいましたが、私はもう六年ほど今では大々的に知られるようになった鬱病うつと呼ばれる心の病でのたうちまわつて来ました。

その主な原因はありきたりでイジメです。ただし、私のイジメられ歴はさかのぼることなんと幼稚園から始まっているのがありきたりではないかもしれませぬ。

虚弱体質きよじやくたいしつで生まれながらに小児喘息しょうにぜんそくを発病していた私は季節の変わり目になる度に体調を崩し、入園するのも喘息で入院していたのでみんなより一ヶ月遅れてしまったのです。

幼稚園児にイジメの感覚があるとは思えないので、単に遅れてやってきた見知らぬ奴にどう接していいか分からなかったのでしょう。ただ明確に私を標的にして、まだ園内の位置がよく分からない私を確か「遊ぼう」とか言う誘い文句で教室から連れ出して、校舎の奥

まった所で私を後ろから突き飛ばして置き去りにしていく男の子の二人組みがいました。

さすがに最初は迷子になって、彼らのもくろみ通りに大泣きしてしまいましたが何回も同じようなことされて行く内に校舎の中に詳しくなりました。数十年たった今でも脳内で校舎の見取り図が出てくるほど、強烈にインプットされています。

次に彼らの出た行動は、整列の時などに私を後ろから叩いて遊ぶことです。家系的に身長が高いほうなので、私の周りほとんど男の子だけでしたので二人組み以外の子にも叩かれた気がします。

これは整列中なので、先生の注意が入って止まるのですがあくまで一時で先生の目がないとまた始まります。

一回、運悪く軽い喘息気味の時に幼稚園に行って整列の時に背中を強く叩かれて、ショックで発作を起こしました。滅茶苦茶苦しくて咳き込んでうずくまってしまったので先生によって保健室に運ばれ家に帰りましたが、発作がおさまってから母にこのことを言うと先生に直談判してくれて整列の並びを変えてもらいました。後ろを女の子にしてくれたのでこの叩きイジメはおさまりました。

幼稚園での体験はおおかたこんな所です。もっと年齢が上がっていれば私自身耐えられたかもしれませんが、もう心の中ぐちゃぐちゃで幼稚園児にして「幼稚園行きたくないよう」と登校拒否のセリフまで飛び出しましたが、親が聞いてくれない。

結局、あまりパツとしない幼稚園を卒業して行きました。

小学校にあがって、私は幼稚園で学べき友達作りがほとんど学べていなくて小学校低学年の時から友達の輪に入るのにやつきになっていました。

アニメなんかのなりきりごっこでも嫌な役をすすんで引き受けて、なんとか女の子グループの片隅にいましたが一度も友達の誕生日会に呼ばれませんでした。グループの中で明らかに私一人だけに招待

もいかずハブられていました。

ただ、その頃度たひかさ重なる入院の為に身についた本を読む習慣が自分の好きなこと趣味に変わってきていて、友達にわざと遊びに誘われず「○○ちゃんはいらない!!」なんて直接仲間はずれにされても図書室へ行って好きな本を片っ端から読んでいったのでそれほど苦にはなりませんでした。

小学校にはウサギや池には鯉こいが泳ぎ、珍しいところでは孔雀くじやうくのつがいもいて人間嫌いの当時の私はこの動物達と触れ合うのを楽しみに学校に来ていました。

また今でもそうなのですが、動物に懷なつかれやすく排泄物の処理なんかも他の子が「キタナイ、くさい!!」と嫌がる中私はまったく嫌じゃないのです。すんでやっていたおかげで飼育担当の先生に覚えられてウサギの出産をこっそり教えてもらい、放課後他の友達に例の如く仲間外れにされた私は先生とウサギの赤ちゃんの誕生を見守ることができました。

ですが、そんな特別扱いが気に触ったのか。小学校に中学年になった頃には事態はますます悪化していました。

よく物がなくなる。教科書・ノート・筆箱例ふでばこをあげたらきりがなく、また本の読みすぎ、暗い所でも明かりつけずに読んでたせいでしょいか。視力もガタンと落ちてきて目を細めないとよく人の顔が分からないレベルにまでなってしまう、その目を細めるしぐさが男子の気に触り「なににらんでるんだよ!!」と集団に殴られることも一度や二度じゃありませんでした。

仕方なしにメガネをかけたらかけたで、「メガネ、メガネ、ネクラネガネ」と顔を見るたびに言われる始末。

図書室に避難しても追いかけてくる物好きがいるので、給食後の昼休みにウサギ小屋や孔雀小屋まで避難するまでずっと悪口に絶えなければなりません。

確かに暗いと言われてもしかたないほど大人しい、悪く言えば消極的な性格になっていた私ですがこの頃になるとその理不尽な扱いに深い悲しみと怒りを覚え、湧き上がってくるそれらを必死で表に出すまいと心の奥の奥へしまいこんでいました。

その無理が最初に出たのは胃でした。そういう目にあうたびに胃がキリキリ痛み、保健室のお世話になる内にあまりに頻繁ひんぱんに来る私を見かねて、保健室の先生に「お腹がからっぽの時に水を飲んで、それでお腹が痛くなったら病院へ行ったほうがいいよ」と言われました。

案の定、空腹時に水を飲んでも胃が痛くなったので母に連れられて近所の病院で見てもらった所胃カメラを飲まされて出た結果へ胃潰瘍よう一步手前まで胃の内部が真っ赤に炎症を起こしていました。

病院の事務員さんが記念にとその胃カメラのカラーフィルムをくれたので、今思うと何の記念だよとツツコムところですが、実際に私の目から見ても酷く赤くただれているのが分かりました。

この時にその胃炎の原因をストレスの一言で片付けずに、精神科にかかっていれば後の地獄を私のみならず家族もまぬがれたでしょうが当時は精神科の存在は今ほど知られておらず、また偏見へんけんの目も強かったです。

結局、胃薬を小学生にして手放せない状態で通学していましたが悪いことはかさなるものです。

小学校中学年の担任教師はおばちゃん先生で、今思うにかなり高齢でろくに生徒の指導もできず生徒間のトラブルにも口を出しても互いに「ごめんなさい」を言わせればもうそれで解決だと勝手に決め込むタイプの先生でした。

人の名前や顔をよく覚えていた私でさえ、この先生にされた行為によって名前をいまだに思い出せず思いだそうとすると拒否反応か、

吐き気がするのです。

この時のクラスにはN君という知的障害（今思い返すとおそらく軽度のダウン症）の子が特別学級から移ってきていたのですが、まあそのN君への扱いは男子女子関わらず酷いものでした。

口からよだれが出ているのを見つければ、「Nよこれだ、こつち来るな！！みんな逃げろ」と男子が騒ぎ、女子は女子で「きったない」とひそひそ言っている始末。

担任が担任なので、注意する者もない無法状態です。

給食の時、当時はよく好きな子同士とかで席を組んで食べるように指導されていたのですが当然N君は一人きり、しかも彼の周りから明らかに皆机を遠ざけて座っているのです。

私は自身イジメの対象ではありませんでしたが、こういう場面を見て黙っていた性格ではないのです。当時は認識ありませんでしたが、表面大人しいようにして自分の胃をズタズタするほど実は感受性も強く情に深い気性を持っていたので、私はどうせ好きもの同士とは言えうわべだけの女の子達よりN君と一緒に食べようと机を彼の所へ持って行ったのですが、「一緒に食べよう」と声をかけた私にN君は「いい、おれひとりでもいい」と断ったのです。

その時の彼の目と声を今でもよく覚えています。自分がどんな扱いをされているかちゃんと分かっている目です、断りの声の中に「おれといっしょにいたら同じめにあう」という声にならない声が聞こえました。

私は何も言えず、ただせめて他の誰よりも彼の近くで彼と同じように給食を一人で食べました。

私が声をかけたことによって、私がN君のことが好きという根も葉もない噂がたって私やN君への嫌がらせはエスカレートしていきましました。

今でも私はあの時のことを後悔しています。声をかけた行為自体は一切の後悔はありません。ですが、彼をより苦しめる事態にしてみましたことにはいくら悔いても悔やみきれません。

その後、N君は学校に来なくなりしばらくして先生から沖縄の学校に転校したことを告げられました。

親の事情らしいのですが、私には彼がついに耐え切れなくなっ
てしまったんだとその最後の一押しをしてしまったのは他のもな
い私だと思ってなりません。

先生のいないところで彼がいなくなったことを喜びまくるクラスメ
イトの中で、私の心の中では明確な意思が生まれたのはきっとこの
頃からでしょう。

「いなくなってしまうたい」

N君がいなくなつて、後悔から生まれた上の想いを誰にも言うこと
なく抱え込んだまま陰惨いんさんな学校生活を送っていました。

N君がいなくなつたので、クラスの男子は新しい標的を見つけ
ました。意外にも私ではなく

Fさんという女の子でした。

Fさんはこれもおそらく家庭の事情でしょうか、清潔な服を着てい
ることがなく髪も数週間洗っていないような感じの女の子で彼女か
らはその微かな異臭するのです。

このまたとないつけどころに、クラスの男子が気づかないはず

がなくむしろ今までN君の影に隠れていただけで嫌がらせはあったのですが、N君がいなくなってそれが一気に悪化していきました。当時はやっていたイジメの俗称「菌うつし^{きん}」。彼女はそのままとな餌食^{えじき}だったのです。

ある男子がわざとFさんにさわり、「F菌だあ!!」と別の男子に触ってまたとその繰り返しを遊ぶ最低の遊び。

Fさんはそれに気づいていましたが、一度も皆の前で泣きませんでした。それがまた気に入らないのか男子の行為はエスカレートしていきFさんの筆箱をとってはそれを男子同士でぶつけあって当たったら「F菌がうつった!!手洗ってくる」と手を洗いに行くのです。

「手じゃなくて、脳みそから全部そっくり洗ってきやがれ」とは当時の私の怒りの声です。この当時から感情が悲しみと怒りに真つ二つ極端にかたより、悲しみの感情に心がかたよると涙が止まらず息が出来なくなる（当時は知りませんでした^{かじきゅう}が過呼吸という精神症状）怒りの感情に心が支配されると普段は親や教師にも褒められるほど丁寧^{ていねい}で大人びた話し方をするのが一変、そこらの男子より酷い罵りの言葉が飛び出す荒れた口調になり行動も激変します。

それが初めて人前に現れたのが、この時でした。

菌うつしのせいで、Fさんの机は掃除の時に誰も運ばずにひとつ取り残されるのですがFさんは視力が悪いので席替えの時に前にしてもらっている^すのでFさんの机がある列だけ誰も運ぼうとしないのです。

運んでもFさんの所でやめ、先生が理由も知らずに運びそのまま他の子の机を先生が運ぶと「菌がうつった!!」と先生の手がふれた辺りをゴシゴシこするのです。これは男子のみならず女子もそうです。

ある日、先生が掃除の時に教室にいない例の如くFさんの机が残されていました。

菌うつしなど根っから軽蔑^{けいべつ}していた私はかわまずFさんの机を運ぼうとしましたが口うるさい女子の一人が「袖^{そで}をまくって手で直接さ

わんないほうがいいよ」と言ってきました。

手に服の袖をかぶせたらすべって運びにくいに決まっています。かまわず、手で運び続けて同じ列の机も運びました。

掃除を終えて、確か着替えをしていた時でした。この時最後の授業が体育で、そういう時は体操着で掃除をするのが決まりでしたから、私が着替え終わった時、男子が3人ほど私の周りを取り囲んで、「お前、F菌がついた手で俺達の机触っただろう？」といんねんつけてきたのです。

「そうだけど、それがどうかした？」

怒りの感情がムクムクと心の中で広がっていくのを感じながら、私がそう言い返すといきなり男子が私の顔を殴りました。

「きたねえだろう、ちゃんと手洗ってから運べよな。馬鹿」

殴られたショックとその余りの理不尽さに怒りと悲しみがごっちゃになって、私は泣きながら叫びました。

「何がどうきたないのよ！！菌がなに？あんたらのやってることのほうがよくばときたないわ

よ、馬鹿じゃないの！！」

後はもう蹴られたり、髪をつかまれて壁に頭ぶつけられたりとやられ放題。その痛みと悔しさから涙が止まりませんでした。

さすがにこの事態にあの担任も駆けつけて、ホームルームの時に話し合いになりましたがあれは話し合いではありません。

担任は私の言い分をまず聞いて、私の話からでた男子達に私に「ごめんなさい」というように言った。それだけです。

本来謝られるべきなのは私ではない、Fさんなのに。男子達が渋々言ったごめんなさいを本当に謝っているんだから許してあげなさいと私にとりなすのです。

期待した私がおろかだった。この件の根本である菌うつしのイジメをこの担任は私の話を聞いてなお見てみぬふりを決め込んだのだ。私を殴った男子よりもこの時の私はこの担任を許せなかった。今でも許していない。その証拠が顔や声を覚えているのに名前だけは苗

字も下の名前もまったく記憶から消されていること。

かわりの私が今その担任を表現する時に使っているのは年の為にしわくちゃん顔から当時つけられていたあだ名「うめぼしババア」だこの一件があつて男子が菌うつしをやめたかといえ言うまでもなくやるわけがない。むしろ担任が無関心なのを知って逆に悪化した。まるでN君の時の再現だった。あまりのショックで虚弱体質な私は風邪をひいてこじらせて喘息になりまる四日間学校を休んだ。

治ったが休日をはさんだので四日もたつて学校に登校し、私が見たのはボロボロの雑巾ぞうきんが水にぬれた状態で私の机に置かれ机の自身が散乱していた光景。それをみてぼうぜんとする私に「その雑巾、Fが使つてたやつなんだぜ。菌仲間なら大好きだよな」と声をかけたのは私を殴つた男子達だった。

何も言わずに散乱した物を机に戻し、乾いた雑巾でぬれた机をふくと「ああ、菌がうつっちゃった」とよこやりがはいる。

心の中は表面ほど穏やかじゃないが、力で彼らにとうていかなわなかったのは四日前に経験済みだったから殴つてやりたい、そのねじりまがつた心のように顔をめちやくちゃにしてやりたいという感情をおさえるのに必死だった。

それからというものの、様々な嫌がらせをされた。怪我也たくさんした。全部全部私の心でおさめようとした。

うめぼしババアがあてにならないから、他の先生にも相談することなんてできなかった。

親にも心配かけたくなかった。まだ小さい妹の世話をしている母さんに迷惑かけたくなかったから怪我也全部嘘の理由でごまかした。こうして、年々悪化し続ける学校生活に希望もなく絶望のみを感じて中学年は終わった。

さいわいなことに、小学校高学年時にうめぼしババアとは正反対のそういうことには厳しい先生が担任だったので私が目立ってイジメ

られることはなかった。

むろん、物を隠されたりする嫌がらせはなくなかったけどもう諦めていた。^{あきら}この諦めが本当は私の心の最終段階に入ってしまったことに私自身気づかずに、私は人間嫌いのある意味人間憎悪にまで成長させた小学校を卒業した。

中学校には他の小学校の子も来るから、事態が少しはよくなるかもしれないという私のはかない望みは入学して早々に砕け散った。

物隠しはなくならない。今度はせっかく丁寧に書いたノートも落書きされたり、授業中も紙くずを投げつけられたりで授業にも集中できなくなってしまった。

ただでさえ、小学校から中学校へと進んで勉強のレベルもあがった所だったので小学校で平凡なレベルだった私の成績は見る見る内に下がり、教育熱心な父の目にとまって塾通いをする事になったがそれでも私の成績に上向きの兆しは見えない。

学校でも家庭でも風当たりが強くなってきた頃、私はついに最後の壁を乗り越える事態を引き起こしてしまった。

家で電話が鳴ったのでとり、内容を聞いて母に伝えようとしたのだが覚えたはずの内容をまるではじめから電話をきいていなかったように覚ええないのだ。

それを説明しても母は怒った。あんなに怒った母は今まではじめてで、父との仲がよくない状況で母に無視をされた瞬間、私の中で何かが壊れてしまった。

二階の自室で首を吊って死のうと思ったが、中学生の私の体重を支えきれず窒息するまえに紐を結んだカーテンレールが壊れた。

物を壊すと母もだけど、父にも怒られる。そのあまりの恐怖に私は部屋の机に置きばなしのノートの切れ端に。

「ごめんなさい、私は悪い子です。死んでおわびします」

走り書きを残して、二階の窓から屋根に出てそこから飛び降りてしまった。

身体が何の支えもなく宙に放り出される感覚、言い知れぬ恐怖のあと地面に叩き付けられた衝撃と激痛で私は悲鳴をあげた。

すぐに近所のおじさんが悲鳴に気づいて救急車を呼んでくれて、私は病院に運ばれた。

足から地面に落ちたらしく下半身の打撲だけですんだことに私は何も感じなかった。ただ、どうして死んでしまえなかったのだろうかという想いだけがあり、病院の救急治療室のベッドで私は「家に帰りたくない、いまさら帰れない！！もう生きていい場所はない！！」わめき錯乱さくらんして看護婦さんや医者に暴れないようにおさえられて、鎮静剤を打たれたと思う。

思うというのは錯乱した後ぱったり記憶がなく、目を覚ましたベッドで寝ていてそばには見知らぬ医者せんせいの先生がいた。

その先生は精神科の医師で、私は怪我は入院する必要はないけれど精神科で入院させるということになったのだと言った。

中学二年の五月のできごとだった。

仕事を休んで駆けつけてくれた父とは顔も合わせられなかった。叱られるという恐怖が私の口をふさいだ。

母は私を抱きしめて泣いた。それにも何も言えなかった。

学校でのイジメ、父との不仲を話し、精神科の医師は鬱病という診断を下した。

抗安定剤を服用して、もう飛び降りないだろうという許可が出るまでに二ヶ月くらいは入院したと思う。

この頃の私はもうすべてに関心がなく、記憶もいまだに曖昧あいまいにしか出てこない。

ただ、中学二年の時の担任はT先生というとても頼りになる先生で私がずっとイジメられてきたことを話すと自分が守ってあげると言って、なんと三年のクラス替えの時に私を自分のクラスにしてくれるように他の先生にかけあってくれたのだ。

物隠しの嫌がらせも、私がなくなっただけという前に私の顔をみて「またか、今度何？筆記用具なら貸すよ」と私用に筆記用具一式用意していてくれたこともあった。

からかわれて酷い悪口で泣いている時も、誰に何をどうしてどういう風に言われたのか詳しく聞いて、その相手を生徒指導室に呼び出してみっちりお説教してくれたこともあった。

私のバックにT先生がいることが分かってくるとイジメや嫌がらせはめっきり減って、共通の趣味をもつ友人にも恵まれて、その友人達と同じ高校に行こうと約束したりなんかして最後の最後で学校が楽しいと思えた。

でも、私の私の家族の地獄はまだその大きな口をあけて飲み込んだばかりだということに気づいていなかった。

そもそもの始まり、地獄の始まり（後書き）

長くなっちゃったので、凄く中途半端に切ります。続きも同様に痛いのでこれで読むのやめようと思った方はごめんなさい。そして、続きを決して読まないで下さい。

それでも、歩き続ける（前書き）

イタイながらも進んで行く私の道のり。

それでも、歩き続ける

高校へ進学して、私は中学とはまったく違うこれが本当の学生生活なんだというものをや々と体験することができた。

中学時代、部活に精神面で入部できなかった私は高校でとっても楽しい部活に入ることができた。

珍しい人形浄瑠璃にんぎょうじよるりの部活で、部長ともう一人の先輩と私しか正式部員がいなかったけれど、老人ホームや公民館で舞台にあらせてもらえてとても嬉しかった。

高校に入って成績も急上昇してトップクラスになり、父との不仲は一応おさまったように見えただけで、まだ精神安定剤の服用をやめることができない私に内心はまだ許していないのが分かっていった。母とは中学のあの一件から、私が聞いたことを忘れたくなくても忘れてしまうことがあること

主治医の先生が脳波を調べたら、そういうことを記憶する所に異常な波形があったので先天的なものだと母に説明してくれたので理解してくれて、イジメについても抱え込まず母しぶんと一緒に悩んでほしいと私を支えていた。

けれど、良くなった成績のせいでまた新手のイジメにあうことになり物隠しではなく、下駄箱を破壊されたこともあって相変わらず学校ではイジメの影におびえていた。

抱え込むと言われても、小中と続けていてきたそれはもう習慣のように染み付いていて私は耐え切れなくなると身体を傷つけて母や家族を困らせていた。

高校二年、またしても同じ五月。

進級した新しいクラスはあの中学の陰惨いんさんなイジメがあつたクラスと
なんだが似ていて嫌だった。

そのクラスで仲の良かったEさんが、その内気な性格からのけ者に
されていて私も彼女を放っておけず一緒にのけ者として扱われてい
た。

日に日に昔のような心境に近づき、進級してすぐの五月の夕暮れ時。
私は昼間のイジメについて耐え切れず、また同じように飛び降りて
しまった。

今度は前の病院が入院施設がなくなっていたので、私はすぐに家に
帰されたがもう飛び降りの常習者じょうしゅうしやということで精神病院の閉鎖病棟へいさびようどう
に入院した。

そこは生きているのに生きていないような人の集まる所だった。

ぶつぶつと何かを呟つぶやいているばかりの女性、永遠と数字を叫び続け
る男性、家族の所へ帰ると毎日決まった時間に荷物を持って出て行
こうとする老人。

そんな環境で、私は強烈な想いが心の中にあることに気づいてしま
った。

「私はもう死んでる。三年前にはじめて飛び降りた時に本当の私は
死んでしまって、今考えている私は私じゃない!!」

心がバラバラになった瞬間だった。

閉鎖病棟から逃げ出したい一心で、入院時の書類に書かれていた文
章を思い出した。

「身が危険な状態になったら、拘束こうそくするか退院」

この文章にすがって愚かにも、私は首吊り未遂みすいをしてあえなく拘束
された。

今までいろんな病気でいろんな病室にはいったが、あそこは別物だった。

ただ広い個室の真ん中にベットがあって、私はそこに寝かされて両手両足をベルトで拘束された。

用がある時はナースコールを押すと看護婦さんが来てくれるが、そうでないかぎり日に三度の食事以外人は誰も入ってこない。

部屋の窓は絶対に開かないし、部屋の隅には便座があってトイレも部屋から出る必要がないようになっている。

拘束は確か一週間くらいで外れたけれど、私はその部屋から出ることを許されなかった。

拘束がとれてからはじめて気づいたが、監視カメラまであって部屋のドアには内側にノブが存在しない。

そんな状況下で、私はただただ自分だけをなじって責めて責め続けた。

そのうちその責めている感情さえいらない、そもそも感情があるから苦しいんだと何度も何度もうわごとのように繰り返して、その部屋から出られるようになった時には心から笑顔を浮かべることも怒ることも希薄きはくになっていった。

帰宅して学校に再び戻ると、私の感情は完全にバラバラになっていた。

楽しくもないのに友達と円満に過ごすために笑う、しゃべる酷く友好的な私。

苦手な勉強でもすんなりできてしまう理知的な私。

男子にからかわれて、怒りにまかせてその相手を殴り罵ののしる私。

私のはずなのにその時の記憶はどこか他人のような感じがして、自分の中に自分じゃない自分がたくさんいて、混乱した。

「解離性同一性障害」
かいりせいどういっせいしょうがい

俗にいう多重人格と呼ばれる症状に近い状態に、私はなっていた。漫画やアニメで面白おかしく描かれるような面白さなどありはしない。ただ一日の記憶が繋がらず、なのにノートはしっかりとられていて体育ではサッカーで見事にゴールしてみせたという。

ありえない。私にはこんな綺麗な字でノートとるなんてしないし、サッカーなんてろくにドリブルもできないのが本来の私だ。

完全に人格が分裂するのをなんとか防げたのは、友人の存在と部活のおかげだった。

友人といってもバラバラに現れる分裂しかかった私と本来の私を見て分かってくれる親友と呼んでもいいかもしれない存在だった。

そう呼べないのは彼女が実は分裂しかかった私の別人格に惹かれていたことが分かったからだ。

その人格はとても紳士的で彼女に優しくしていたのだ。

ちょうどその頃、主治医の精神医が変わって分裂する前に統合する治療が始まりかなりの月日をかけて一つ一つ繋ぎ合わせて、やっと記憶が戻ってきた頃にはもう二年生も終わりに近づいていた。

三年に進級する前に、コースの選択があったので文系好きな私は迷わずそれを選び三年時のクラスはほとんど仲良しばかりでイジメ皆無の本当に幸せな一年になった。

もちろん、受験生なのでその悩みはあったがはじめて好きな異性ができたり、勉強面ではよいライバルに恵まれて落ち着いていた。

大学に進学するのは中学からの夢だったので、二年の悪い成績を挽回するべく三年は頑張って、テストでライバルには負けたがそのライバルと学年ワンツーを独占することも何度かあった。

志望の大学も決まると、三年の夏休みにAOで早々と合格を勝ち取って後半を結構楽しく過ごして高校を卒業した。
はじめて本気で卒業したくないと思ったのは高校だけである。

さて、大学生活が始まり今まで許可がおりなかったバイトも始めたのだが、またしても私は友人関係でつまづき、せっかく受かった大学にも一年の後半からほとんど行けなくなっていた。

この時、鬱の症状が激しくでて朝は起きれず物のろくに食べれない拒食症になってしまった。

留年が確定し、来年はと意気こんで見たもののその来年も前半だけで留年が決まりそうな勢いで、私はもうしまいと誓ったことを破ってしまった・・・今まで一番大きな形で。

どういいうわけか、またしても同じ五月の雨の日。

散歩に行くのと置手紙をして、家を出た私の足は近所のマンションに向いていた。

そのマンションは中学高校時代の友人が住んでいたマンションで、私はその四階から飛び降りた。

落ちた瞬間に意識が消え、おろらく失神したのだろう。

気づいた時には緊急手術をおえて、集中治療室のベットの上だった。複雑骨折で、何度も手術して半年以上入院した。

その入院の間に、Oさんという友人ができた。彼女も職場のイジメで飛び降りて入院していた。

彼女は私より軽傷だったので先に退院したが今でも連絡は欠かさない。

もうしない、もうしないと何度も言ってきたが今回の件で心底骨身に染みた。もっともその代償は高くついて私の片足はもうまともな状態には決して戻らない。

取り返しのつかない代償を払って気づかされたのは、まだ私は死ぬべきではないという当たり前のこと。

人間死ぬ時が来たらどんなにあがいても死ぬ。大統領だろうが、ホームレスだろうが、犯罪者だろうが死は平等に振り注ぐ。

その死が来る日まで、私がいくら死のうとしても死ねないのだと・

・それが寿命じゅみょうというものだと思つた。

今、過去をふりかえりこうして書きとめて人目にさらしたのは過去の私への引導です。

そして、もしも同じ想いしている人が見てくれたなら何かの意味もあるかもしれないと思っています。

それでも、歩き続ける（後書き）

やっと書き終わりました。

余りに急ピッチ執筆の為書いてて腱鞘炎気味です。

執筆時間約半日ですよ、誤字脱字ありそう。

ストップかかったので、後でよく調べます。

お付き合いいただきありがとうございます。

と思いきや続いてしまいました・・・。

暗闇の中の光（前書き）

前の二部とは違う視点の話。重複する箇所あり、読まなくても可

暗闇の中の光

さて、続編というわけではないが前の二部がイジメの実体験やそれによる私の精神や肉体の荒廃がメインだったので、ちよつと違う目線の話を書いてみようと思った。

幼稚園・小学校・中学・高校・大学の間にいろんな体験をしてきたわけだが、荒んでいく精神とそのバランスを失った心からリストカットやオーバードーズ・・・睡眠薬の大量服用、合計四回の飛び降り自殺未遂で、ボロボロになった身体でなおもまだ生きていようと思えたその動機の話だ。

幼稚園・小学生の頃には残念ながら人間不信で、何を楽しみにしていたかというと、もう本読むことしかなかった。

この本を読む・・・読書という現在まで続く趣味は、ある意味三つ子の魂百までというやつだろう。

まだ字も読めない頃から、小児喘息で入退院を繰り返した私に、母がお見舞いに来るたびに絵本を読み聞かせてしてくれていた。

ここまでならまあ普通だが、私の恐ろしき本への好奇心は、字も読めないその絵本を絵と母が読んでくれた内容を何度も聞き見る内に、幼児言葉でその絵本のあらすじを暗唱あんしょうして、母を驚かせたというところからして、本当に生来本が好きだったのだろう。

困ったことにその絵本・・・あの有名なパンのヒーローの話なのだが、十年以上たつ今でもおぼろげ絵とあらすじが言える。

パンのヒーローとそのライバルの誕生から初対決の話。おでんのお寺の話。カレーが初登場した話。

おいしい、どんだけ脳内にとどまってるんですかと自分でツツコミたくなります。

母曰く「あの頃は賢^{かしこ}かったのよ」と、まるで今が馬鹿ですと言わんばかりにからかわれるが、本に関しては一度読んだらそうそう内容を忘れたりはしない。

今でも読んだことのある本ならタイトルを言ってもらえれば、ざっとあらすじが言える。

小学生の時には、図書室に入り浸ってどんな本を読んでいたかという、人間嫌いを反映して、ファーブル昆虫記やシートン動物記など動物や昆虫植物の生態を書いた本や、今現在は生きていない偉人の伝記・・・ライト兄弟やらナイチンゲール。

そして、中でも一番のお気に入り、今でもその図書室の間取りのどこに置いてあったか、はつきりと覚えているのが星座誕生の神話シリーズだ。

ギリシャ神話だということは後で知ったことだが、その神話の世界に深くのめりこみ、これも現在まで至る読書から発生したもう一つの趣味、物書きに繋がる。

中学生になると図書室で借りた大量の本を読んで、学校の憂鬱な時間を取り切り、家に帰ればつたない文章で、自分の思い描くストーリーをノートに書くのが楽しみだった。

中学三年と高校三年の合計六年の間に、書き捨てた小説はそれこそ集計不能。手元に残っている過去にノートの記述を元にすればナンバー128まであることから、完結した話だけで28作あったらしい。

当時のその28の小説は、今の私にとって風変わりな日記のようなものだ。中でも印象的^{いんしょうてき}で異作なのがその最後のナンバー128「人界・妖魔伝」である。

主人公は中学二年の美少年で、実は人間でないというありがちな設定だが、なんといじめを苦にして自殺した少女がでてきたり、その

クラスメートのいじめっ子が、当時実際に私をいじめていた男子の名前そのままだったりと内容的に小説の中でいじめの復讐をしている。

まあ、復讐といっても主人公が異界・・・多分魔界と直結させちゃって、学校の中で悪魔やら妖怪やらが、そのクラスメートを襲うけどちゃんと主人公が助けてるところからして、怖がらせてはいるけど、誰一人して死んではない。

ただ一人、主人公が転校してくる一ヶ月前に少女が飛び降り自殺していて、主人公とその少女の霊は仲間という設定から、その死んだ少女は当時の私が物語の中で描いた自分の姿だったのだろう。

この小説を書いた時期が初めての飛び降り自殺未遂の前だったのか、後だったのか分からないが、前だとするなら本当に死んで呪ってやるというメッセージが、後だとすると死に切れなかったが決して許さないという怨恨が見え隠れする作品だ。

ともかく、ナンバー28は異色だが、他のファンタジーはまったく異世界で楽しい内容なので28が例外的なのでしょう。

中学時代にはそれなりに友人もいなくなかったが、イジメによって自分の死さえ願っていることを言うなんて絶対になかった。

言ったとしても帰ってくるのは口先だけのなぐさめ。悪くすれば尾ひれのついた噂になるのは小学校の時に互いの秘密ごとを言い合っていて、結局クラス中に吹聴された経験からそう決めかかっていた。

二年生の時の飛び降り未遂も、両親から担任へ連絡はあったものの両親から口止めされていた。

学校や家で心のよりどころがなかった当時の私の安らぎは、なんと週二回の塾であった。

塾といっても理系大卒の男性が夫婦でやっていた個人塾で、単に私の家から一番近かったというでそこへ通わされていた。

最初は同学年の子達と一緒に勉強し始めたか、私がいかに基礎きそができていなかったのと、指されて黒板に数式の答えを書けなくて泣きそうになったのを見て、その塾のA先生は最初の授業の後、私を教室ではなく自分の書斎というか個室によんで、私に学校で何があったか話してみろと言ったのだ。

てつきり数学があまりにできないので、学校でちゃんと授業を受けていると話出そうとしたら、先生はこう言ったのだ。

「授業をちゃんと聞く子で、しかも他の子の前で問題が解けなくて泣きそうになる。学校で何かあったんだろう？数式の解き方より君にはもっと大事なことを教えたい」

一言もイジメられているんだろうとかなかったが、先生は分かっていたのだろう。泣きながら全部話した。

授業をちゃんと聞きたくても、ごみを投げつけられて集中して聞けない。ノートをとっても落書きされる。国語と違って数学はノート提出がないから、数学のノートはもうほとんど読めないありさまであること。

「よし、今度から一対一で分からなくなった所からやり直そう。今からやれば絶対に分かるようになる。俺がそうさせる。後、学校で何か嫌なことがあったらここで好きなだけ言ってい。君の中で溜め込むより、俺に言えって大丈夫。俺はそういうこと聞くのが好きなおせっかいだから聞いてこうしろと言うかもしれないが、他の誰にも言わない。他の人の言ったって思ったらここ辞めていいぞ？俺が授業料全額返して辞めていいからな？」

最後の方は冗談まじりだったような気がするが、先生のご好意でそれからは一対一で基礎から着々と積み重ねていって、遅れも取り戻した。おまけに一対一でも、授業料は一切上がったりしなかった。先生に嫌がらせの話をすると、まるで自分の事のように憤慨してよくこう言ったものだ。

「確かに酷いことするやつだから、今は憎いと思ってもいい。けど、後のこと・・・将来とかのことを考えるとそいつらのほうが、

今自分達がしていることがそのまま返ってくるより酷い仕返しをくらう可哀相な奴らだと同情してやれ」

当時はよく分からなかったが、確かに私をイジメていた人達の将来が今明るいかと言えばそうとは思えない。

二年の時に入院したせいで、ギリギリで公立高校にいった私だが高校進学できずに族の世界へ行ったイジメっ子もいたし、別の高校で麻薬で捕まったという噂も聞いた。

学校のT先生が母親のような感じで、塾のA先生が父親のような感じを当時は抱いていた。

実際の父母は、中学二年に私が突然起こした大惨事にパニック状態で、私は家族の絆を壊す爆弾だった。

実の娘にそんな行動をされると、親としてどう対処していいかわからなくなってしまったのも今ならとてもよく分かるし申し訳なく思っている。

ただ、何があっても家族がバラバラになることはなかった。母も父も私や妹の問題行動に凄く悩んではいたが、絶対に握った手を離すことはなかった。

暗闇の中の光（後書き）

私の生きがいの読書と小説を書くきっかけ。そして、最大の恩師のお話でした。

されど雲間に隠れる月のように（前書き）

昔の恋の話や学業の話です。お嫌いな方は読まないで下さい。

されど雲間に隠れる月のように

中学三年の担任T先生だったので、私は自分の行きたい公立高校合格へ向けて学校も休まないように行き、塾のA先生との受験勉強の甲斐あって志望高校に合格することが出来た。

担任やA先生にも、もっと上でも大丈夫と言われたが私はその高校にどうしてもいきたかった。

その高校にしかない部活があつて、そこへ入部したかったのだ。

乙女文楽部・・・桐竹流乙女文楽という人形浄瑠璃を演じる伝統芸能の部活なので、私が入部した時部長のT先輩とW先輩の二人しか正式部員がいなくて廃部寸前だった。

週に二回の練習だが、厳しいこと凄まじく文化部の中の運動部の異名をもっていたが、私は部長の扇さばきの見事さに感服・・・惚れ込んでしまい、もう部長に着いて行きます！！と入部届けを出したら、顧問のF先生にも期待の新人としてえらく気に入られた。

部活のおかげでかなり順風満帆じゅんぷうまんぱんなスタートを切った高校生活1年目。この年、私は初めてのことを二つ体験した。

一つ目は気に食わない人物にやり返してしようとして実行したことだ。誤解を解く為に書いておきますがイジメでも何でもありませんよ・・・イジメの仕返しではありません。

では、やり返したくなる出来事とは何かと言いますと、ちょっと長めにお時間下さい。

私と同じクラスに、たまたま新入生代表の言葉を言ったD君がいたのです。

このD君、新入生代表が受験成績一番の生徒になるという事実から、すっかり天狗てんぐになっていたのです。

数学の授業中に指されて、黒板に答えを書くときも簡単な数式だと「こんな簡単な答えさせるなよ」と言い難しいのだと「まあ、俺しか解けないだろう」と言う始末。

挙句、中間の前の宿題テストというか模擬もぎの小テストで、クラス一位になった時になど「俺は本当はく高に行きたかったんだけど、定員減ったしここに来てやったんだ」と公言して大ひんしゆくを買った。

このセリフには私もカチンと来て、D君に「そんなこと言うもんじやないよ」と言ったのだが聞き耳持たず。私の順位が自分より低いので完全に馬鹿にしてみました。

「先生、ちょっとどうにかして欲しいことがあるんだけど」

と塾のA先生に話を持ちかけてみたところ、D君が自分は有名な塾に通ってるから学校で勉強しなくてもいいと言っていたことを言うたら。

「俺はそういう奴が嫌いだ。よし、コテンパンにのしてやる」

「先生？何を・・・」

と私が及び腰になるほど乗り気になってある途方もない計画を私に実行させたのです。

「次のテストから一年間、奴をクラス一位から蹴落けおとしてやれ!!」

「そんな無茶な・・・だってあたし」

「お前の実力なら出来る。俺も分からない所教えるし、そうすれば減らず口も叩けなくなる」

模擬の小テストで私の順位が二番だったのを先生はしっかり見ていて、この計画を敢行した。

そのすぐの中間テストはクラス順位3番で、D君の天狗は更に凶に

乗ったものになって、嫌がらせを受けていたようですが、「負け犬に噛み付かれた」とそう言い放ったのを聞いて、同情転じて「絶対蹴落としてやる」という決意に燃えた。

結論から言っちゃうとそれ以降のテストのクラス首位は私が独占しました。A先生のスパルタ指導と部活がない日の自主勉強という影の努力の結晶です。

今でも手元に残ってる当時の栄光の痕跡。

国語83 現社94 数学71 生物93 英語87 家庭67
クラス順位1 学年順位2

今から見るその点数に驚き、もう二度と取れないと断言しちゃいます。

数学が低いのは中学の遅れの悲しき名残^{なせり}。家庭科は単に苦手。こんな点で学年二位なんですから、母校のレベルがもろバレです。

しかし、見事にD君は減らず口を叩けなくなりました。授業を日頃からまともに聞こうとしてない、ノートもしっかりとらない、塾と己を過信しすぎたのが一年間の私との勝負に敗北した原因でしょう。あれです、驕^{おご}れるものは久しからずという奴です。

もう一つの初めては………初恋という奴です。うわっ、今思い出しても赤面必至です。

同じクラスのS君、私は下の名前にちゃん付けしてまるで幼馴染のように呼んで仲良くなっていたんです。見た目は普通というか眼鏡君って感じですが、優しいんです。そして、面白い。

私も女子ながらゲーマーだろうと言える位のゲーム好きで、男子達と話が合うことびつくり。互いにRPGのソフト貸したり借りたり、攻略情報教えあったりしてましたが、S君には特に惹かれました。初めて異性にそばに居て欲しいと思った淡い初恋。周りにバレまくっていたのですが、私が告白するまで皆知らないふりをしてくれたいたというのですから、恥ずかしい。

ラブレターなんぞ書けねえ、ましてやメールで好きななんぞ言えねえと悩み悩んで、バレンタイデーにチョコ渡して、渡しざまに「大好き」と彼の耳元に言い残してそのまま逃走。恥ずかしさのあまり返事聞くまでその場に居れなかったんです。

結局、丁重にお断りのメールを貰い、失恋。しかし、互いに友達づきあいは変わらず私にとってS君は高校時代の親友と呼んでも過言ではない・・・向こうはどう思っているかは分かりませんが。一年の天国ぶりに比べて、二年は地獄でした。

特に閉鎖病棟から退院後に、人格バラバラのまま学校行ったので大変なことになりました。

当時の記録が手元に残っていたのを見つけたので、それを元に書きますと私の他に6人別の人格がいらっしやったようです。

当時は本当に記憶が曖昧・・・私という人格以外が身体を動かしていた時間が長かった時期なので記憶がないといったほうがいいでしょうか。

Eさんのことやそれでいじめられて自殺未遂したのは覚えていますが、それ以降に学校復帰してから記憶が約半年分薄いというか欠落気味です。

アキ・シン・ユキ・ユナ・リュウ・猫というのが当時内在した人格が名乗っていた名、あるいはつけられた名です。

アキは冷静沈着な男性で、勉強も運動も私よりできたのですが同年の女の子・・・また小さくて可愛い子なだけどを口説いて恋人にして大変問題になりました。

アキにとっては女性が恋愛対象でもまったく違和感なしだったようですが、私からすればおありです。もう事後収集が大変でした。その子のとの友情も破綻はたんしました。

シンは喧嘩っ早い男で、手のつけられない暴れ者。嫌がらせで机に落書きされているのを見て、キレて机を蹴り飛ばして暴れたり、男子と喧嘩して至近距離から椅子投げつけられたのを平然とかわして反撃するなど、明らかに私じゃないのが分かってしまう、はた迷惑な人格で出てくるたびに「キレさせたら怖い」という噂が流れて大変でした。

ユキは幼い男の子で、学校では出てこなくて、家を出てきては妹と遊びたがって気味悪がられたらしい。六人の中では一番問題がなかった人格なのですが・・・僕口調で話すので妹が怖がっていました。

ユナは唯一女性の人格ですが、毒舌で学校の気に入らない女子と口論末泣かして、後で何も知らない私が呼ばれて教師に説教され身に覚えのないことで謝ったという一番厄介な人格。

リュウは何故か常時エセ関西弁なお祭り男で、スポーツ万能。特に私がサッカーでドリブルもできないのに、リュウはドリブリと華麗にシュートまで決め「神が降りた」と苦しい言い訳を皆に押し通さざるおえなくなった。同じプレーができないのが身体は同じでも、なかみ人格が違うせいだとは学校の誰にも理解してもらえなかった。

最後に猫は文字通り猫のように、家の床だろうが廊下だろうがゴロゴロしてベットに引きずられてると寝る。目が覚めるといつのまにかベットにいたら猫が出た後というので決まりでした。

部活の先輩が卒業して、後輩といさかいを起こし私は部を去り、二年が入院もあって単位ギリギリでなんとか三年に進級させてもらいました。

されど雲間に隠れる月のように（後書き）

すいません・・・昔の自分にケリをつけたいだけなんです。

閉ざされた世界（前書き）

女子大学の話と後半は闘病史です。苦手な方は読まないで下さい。

閉ざされた世界

私はどろどろしたものが心に溜たまると、決まったパターンの行動に出る。

昔はよくリストカットをしたが、あんまりザツクリ切りすぎて、今ではカッター恐怖症だ。

で、そうなった今の場合手っ取り早いのが、音の海に溺れる・・・
ようはコンポでCDを大量にかけまくって聞きまくるという行動。
それを昨日の午後約4時間ほどやりました。

それでも落ち着かない、またどろどろ感が残ってる場合がこれ・・・
文章にするという行動。作った文章は主治医に渡す場合もあるが、
大概は闇たいがいに葬ほうむってきた。

が、何度も書いて捨てる繰り返しも面倒なので、しっかり書いて載せようと言う動機で始まったのがこのまだ暗い道の途中である。

今回吐き出そうと思ったのは、高校卒業後に行った女子大学の体験だ。

高校卒業と同時にA先生の塾も辞めた。本当は辞めたくなかったが、先生が私を最後に塾生をとるのをやめてしまったのだ。

元々塾の先生が本職の人ではなく、多忙な人だった。私は先生の最後の教え子として塾を去った。

そんな心の支えの欠けた状況で、初めてのバスや電車での通学や女子しかない大学という空間は今思い返しても恐怖しか残っていない。

バスや電車内でのトラブルは当事者になったことはないにしても、見るだけで私には怖かった。

幼少期に父によく怒鳴り叱られていた経験から、成人男性の怒鳴り声には無条件で身体が怯えを感じて震えてしまうのだ。だから、女子大を選んだのだが甘かった。

小中高と男子にイジメられた経験のほうが出来事としては派手だが、女子特有の陰湿な嫌がらせも実は結構引きずっていたことを自覚していなかった。

また、私はおしゃれというものに興味関心のない年頃の娘としては、そういう感性が明らかに劣っている。よって、そういうおしゃれな女の子の多い女子大学では、私の存在は入学当初から浮いた。

会話もまったく噛み合わないというか、共通の話題が欠如していた。次第に私に声をかえるのは必要最低限になり、ついには大学に居る間一度も会話しないなんて当たり前な感じになっていた。

いかに本が好きでも、これだけ人が居て言葉を発しない異常な状況に、私は大学へ行く意欲を失くしていた。

高校三年の時に夢を叶える為にとその大学のその学部を選んだというのに、孤立した孤独感に耐え切れなくなってしまった。

そうは言っても、退学なんてできなかった。

自費ではなく両親が通わせてくれていると思うと、行かなければという気持ちと行ってもただ一人という孤独感に、裂かれるような心境だった。

結局、大学の門まで来ても中へ入れないという状況になって近くのカフェや古本屋で時間を潰して帰ってきたが、当然欠席が続いて留年。

留年の通知は両親宛に来て、私は散々叱られ今度こそはしっかり通うと誓い、アルバイトも始めることになった。

アルバイトはもし大学が続かなくても、先の費用の為に始めたの

だが、ただ大学へ行くだけでも辛い中でもバイトの両立はすぐに破綻^{たん}し、疲労で遅刻がかさみ二度目の留年が決まりそうになった時。

私はマンションの四階から飛び降りた。そのマンションはバス停までの道のりにあり、踊り場の壁も体力のない私が乗り越えられそうな高さだった。

壁を乗り越えて、手が離れた瞬間――――私の意識はぶつかりと切れた。

次に目を開けたら、もうICU・・・集中治療の広大な病室の一角にいた。右肩が外れて、骨盤を複雑骨折して金属のそうがい固定で、なんと腹部から金属の柱が組まれていた。右足も骨折してギブスで固定されていた。

重度の骨折の為に高熱にうなされ、その中で夜勤の医師に「お腹から生えてるのって」と泣いた。すぐには骨盤を支える為の金属だと分からなくて、泣いてとってくれとわめき、結局睡眠薬を点滴で流されて寝かされた。

しばらくしてから、やっと自分がどういう状況にあるか分かったが、いっそ死んでいれば良かったくらいの苦痛に幻覚を見たくらいだ。

右肩はすぐにはめ戻されたので、両手は動かせるが寝たきりだった。寝返りもうてない。奇跡的に頭部にはかすり傷ひとつなかった。コンクリートに四階の高さから打ち付けられたというのに。

事態が飲み込めてきた頃には、はっきり自分が下手したら車椅子生活になるという話を聞いた。

両親が・・・と言っても母が泣くので、私は母が帰った後暗くなつた病室で泣いた。泣いたってよくなるわけがないのは知っていたが、涙が止まらなかった。

I C Uの大きな部屋には動けない患者さんが、いっぱいベットの上にいることを知ったのはどのくらいたった頃だろうか。
いろいろな人が運ばれきたのを見ていた。

足の骨折に金属固定が必要で、運ばれた時の緊急手術から一ヶ月後に足の手術をした。その手術がすむと一般病棟の移ったが、そこが長い入院の始まりだった。

閉ざされた世界（後書き）

吐き出してますねえ・・・しばしお付き合い下さい。

閉ざされた空間（前書き）

入院生活やリハビリの話。苦手な方は読まないで下さい。

閉ざされた空間

一般病棟に移っても、寝たきりには変わりはなかった。

ただ受け持ちの看護師チームがあつて、食事を同じ人に介助してもらう内に励まされて、立ちたいという気持ちが芽生えてきた。

だが、立つには私の背骨はぐらついてしまつて、金属で固定しなければいけなかった。その手術の前に骨盤を安定させなければいけなくて、それを待つ間が辛かった。

しかし、運の悪いことに骨盤を支えている金属の出ている腹部の傷からウイルスが出てしまつて、急遽その金属を抜く手術をした。

その三度目の手術の後、少しベットを起こせるようになったので窓の外が見えるようになった。

が、そこは九階の病室・・・しかも窓際だったので高さで見た瞬間パニックになりかけた。

マンションの四階から自ら落ちたことによって、高所恐怖症になっていたのだ。

いろいろな画像検査のすえ、背骨への金属固定と骨の移植が決まり、四度目の手術は大手術になった。

麻酔から覚めた後、ショックで痙攣けいれんを起こして呼吸もうまくできなくなり、強力な痛み止め・・・モルヒネかもしれないと睡眠薬で再び眠らされた。

翌朝目覚めたら、うまくしゃべれるようになっていたので、痙攣を目撃した母は喜んでいた。

この後は骨の安定度が高まると同時にリハビリを始めた。
まずはベットサイドにリハビリの療法士さんが着てくれたのだが、
金属固定と長期のギブスよってガチガチに固まった右足の筋肉は悲
鳴をあげて、療法士さんにのぼす動きをされる度に私自身本当に悲
鳴をあげたが、再び立つ為にはまだそれは序の口だった。

固いプラスチックのコルセットを型を取って作り、それをはめられ
るようになる。ベットからストレッチャーで運ばれて、リハビリ室
で傾斜台^{けいしゃだい}にのって、立つ姿勢の角度になれるだか、血圧がガクッと
落ちて気持ち悪くなり、また右足が自重によって痛み、90度にな
るまで何日もかかった。

傾斜台をクリアーすると、今度は車椅子にうつる練習になった。こ
れが辛い、右足に体重がかけられないし、腰が不安定でほんの一瞬
しか自由に動けない。

「動けない!!」と悲鳴をあげても助けてくれるわけではない、そ
ばにはついていくが決して手は貸さない。それがリハビリだ。
何度も何度も繰り返している内に、コツというか左足だけで体重を
流すことを身体で覚えて、車椅子に乗れるようになった頃には、も
う次のステップがまっていた。

並行棒^{へいこうぼう}に捕まりながら、右足の下に体重計を置き、全体重の三分の
一から順に乗せて立つ練習である。

右足に体重がのると痛くて逃げてしまうと、「三分の一のってない
ぞ」と乗せるように言われて、後は痛みとの戦いだった。

その練習以外にも、寝たきりで衰えた筋力^{おしろ}を戻す筋トレも、運動が
大の苦手である私には厄介だったけど、数ヶ月間で衰えた筋力を誰
よりも痛感していたのは私自身であり、身体だった。

平行棒での加重^{かじゅう}が増えてくると、今度は歩くという次のステップへ

進んだが、立っているだけより、歩くほうが楽だったのには驚いた。足の加重制限がなくなると、即並行棒から歩行器ほこうきという押しながら歩く器具でリハビリ室を歩くメニューが加わった。

そうして、車椅子と歩行器で歩ける段階になった時。リハビリだけでは入院していられなくて、別の病院に転院し、久しぶりに外へ車で移動した。

季節はすっかり移り変わり、梅雨から夏、そして秋へと変わっていきこうとしていた。

転院先でリハビリメインの入院生活は、過酷かこくで、朝起きれなくて朝食を食べない日もあり、そんな日は婦長さん直々にお叱りを受けた。歩行器で歩くことにはすっかり慣れていたけれど、杖で歩くのはまだたどたどしくて、私自身も辛い気持ちが生じた。先につけて、リハビリに嫌気がさしてきたある晩。

眼鏡を床に落として、拾おうとしゃがんだ瞬間転び、その物音で駆けつけた看護師さんにベットまで運んでもらった時、このままでは家に帰れないと焦あせりが生まれた。

私の家には急な階段や段差もある。このままリハビリから逃げていては帰れない。杖での歩行にその痛みを耐えて、筋トレも頑張った。三段くらいの階段を上り降りする練習もはじめて、リハビリ室の近くにある階段を十段ほど登り降りができるようになり、杖で歩くことにも慣れはじめて退院は無理でも、一時帰宅はできそうになった12月の中旬。

背中への手術の傷が開いてしまった。膿うみがまるで血のように流れ出し、一時帰宅の望みは消え、かわりに元の病院へ再転院が決まった。一週間で部屋が決まり、再転院した翌日に傷の様子を調べる為の五

回目の手術をした。

その五回目の手術日は、皮肉にも私の二十歳の誕生日だった。二十年前の誕生と同じ日同じ時間、私は手術の為麻酔によって眠っていたのだ。

閉ざされた空間（後書き）

何回手術するねんと思いましたよ。けど、しょうがない。続きます。
ええっと、小説を投稿する気になっちゃいましたので、そうします。
すみません。うつろいは更新中止です。

サーバー（私の脳）がダウン（書いてはいけない）しました。
というわけです・

新たな光

五回目の手術の結果、なんと背骨の補強の為に入れた金属の周りから、ウイルスが繁殖し、腰から背中までの傷口まで菌の侵食した道ができて、ついに傷口から溢れ出てきてしまったという恐ろしい事実を知った。

私の体内に入ったウイルスは、手術室にしかない特殊なウイルスで抗生物質に強い対抗性のウイルスで、このまま金属を入れておくといつ背骨の中まで侵食されてしまうか分からないので、年明けにも六回目の手術が組まれた。

よって、その年。

私は、五月から一度も家に帰れず、誕生日とクリスマス。そして、大晦日と正月を病室で迎えた。
おおみそか

六回目の手術は正月明けに行なわれ、背中から金属を抜き、侵食された肉や骨を削った。
けず

その為、術後一日をあのICUで過ごし一般病棟へ戻ってきた。

この後、前の時と同じリハビリ療法士さんとリハビリをしていたが、なんと傷がなかなか塞がらなくて、ついに七回目の手術をすることになった。

ここまできると、入院費や手術費のことで両親に申し訳なくなってきたが、それを母に言ったら「お金の心配はいいの、あなたの命が大事。お金でなんとかなる内に命を捨てようとしなideよ」と怒られた。

本当にその通りだ。幻覚の可能性もあるけれど、最初にICUにいた時死んだ祖父に会って怖い顔で睨まれた。

あれがもし幻覚でなかったら、祖父もあの世から怒っているということでも痛く反省していた。

七回目の手術でようやく傷がふさがり、季節は春の先走り近づく三月。私は退院することができた。

この半年以上の入院で、私は一人の女性と出会い救われた。

〇さんは再転院した時に同じ病室の向かいのベットいた。自分と同じ飛び降りて怪我したのは分かっていた。

というのも、入院している時は病室まで精神科の先生が来るので、私のことも彼女のことも聴こうと思えば筒抜けなので、聞こえてしまったというのが正解かもしれない。

そんな彼女にどう話しかけたらいいか分からなかった。なにせ、年上の女性だったし女子大で女友達作りに失敗したばかりだったから、ためらいばかりで挨拶も口から出てこない。

そんな時、彼女が精神的に過呼吸かしきゅうを起こしてしまい、私が自分のナースコールを押して「向かいのベットの患者さんが過呼吸起こします」と看護師を呼んだことがきっかけで、お互いの名前と携帯の番号やメールアドレスを交換し、友達として仲良くなることができた。

許可がおりたので、詳しく書かせてもらおうと〇さんは保育士で、職場の上司のイジメに耐え切れず、自宅から飛び降りを図った。私がマンションの四階からだと言ったら、よく生きてたねと驚かれたくらいだ。確かに今思えばよく生きてたと思う。

〇さんのほうが同じ飛び降りでも私より軽傷だったので、先に退院してしまっただけその後にお見舞いに来てくれたり、私の退院の時にはお祝いをくれたり、今でもメールのやりとりをする良き友である。

塾のA先生以来、心許せる他者に出会えなかった私にとって彼女との出会いは偶然とは思えない。誰が言った言葉か忘れたが、出会いに偶然はない。みな出会うべくして出会うとはこのことだろうと思っ
ている。

三月に退院して、早六ヶ月。

最初の動けなさはどこへやら、家の中なら杖なして歩き回っている私だが、なんと来月八回目の手術をすることになった。

右足に入れた金属がどうも相性が悪かったようで、皮膚が青く変色し始めて、じんわりと広がってきてしまったから、固定して一年たつので抜いてしまおうということで手術が決まったのだ。

不安があるから、こうして文章にして吐き出しているのだが、もうなすようにしかない。

これから先九回目だってあるかもしれないし、私ももし結婚して子供が出来たとしたら、出産だって手術とは比べられないものだと思うっているから、落ち着いて八回目を乗り切ろうと思っている。

すごく個人的なことだが、八回目の手術を乗り切れれば念願だった落語を聞きにいけるのだ。それを目標に乗り切ってみせようという決意表明です。

新たな光（後書き）

やっと吐き出し完了です。

一度書き出すと書き終わるまで、他のことができない。おまけに放置しておく、拒食になるという作業なのでまたしても急仕上げ。続きそうだけど、ここで一応ピリオド打ちます。乱筆乱文で申し訳ありません。

間違わないで（前書き）

これは私の精一杯の祈り・・・この国の過去の過ちを繰り返してはいけないから。

間違わないで

私のファンタジー「うつろい行く先に」を面白いと言ってくれた方には、大変申し訳ないが、あれは、自分とは違うの物の見方をする女が書いたから、ああなった異作なのだ。

私は身体に二つの障害を抱えた人間だ。

だが、独りの人間であり、一人の女だ。

そこを間違えるな！！

私はこの世界がおかしいと思っている人間の独り。

だから、精一杯の手段で、あることのみを伝えたい。

世界から、どんな小さな争いも・・・起こったとしても、見過ごさない者がいる世界になって欲しいから。

私は学校という現代の戦場で、数々の言葉の暴力や嫌がらせによって、自分は生きてはいけない者だと勘違いしたのだ。

周りから、無視をされる・・・これは迫害だ。

周りから、いなくなれと言われる・・・これは死の宣告に等しい。

日本は世界に、「人類はみな平等で、生きる権利がある。だから、世界に平和を」を掲げた国ではないのか。

国の首脳部まで、その認識が低下したのは問題だ。

私の祖父は満州へ行き、シリベヤ抑留の生存者であり、祖母は東京大空襲の生存者だ。

だから、戦争をしてはならないと言える。

生きて帰れた祖父と生き残った祖母がいたから、私がいるのだよ？

日本には仏教・・・つまり、ご先祖様を大切にしましょうという素晴らしい宗教があるのに、何故、他国の宗教概念にあわせようとする。

イエス・キリストも人間だよ？・・・神様ではない。彼は人類が争い合うのに耐えられず、自ら十字架にかかった。

自分の意思を世界が、正しくついでくれることだけを・・・祈ってね。

共通概念は一つ。争いの犠牲者が独りでも少ない世界を・・・共に作りましょう。

なのに、いじめ・偏見・迫害・・・日本は狭い国土で、急激に発展しすぎた。

情け・・・他者を思いやる心を失ったままでは、日本はますます孤立する。

国中がバラバラでは・・・滅びの日は近い。

現に・・・今は何月ですか？

秋・・・なのに、蝶が舞い・・・ひまわりが咲く・・・どこかで桜も狂い咲きした。

日差しが・・・夏のままなのだ。

ここままでは・・・日本は砂漠化します。

アスファルトによって、土が熱を吸収できない今の日本では・・・
・もう限界が近い。

だから、各地で野生動物が大量発生したり、撃滅している。

何も、これは日本だけじゃない。

世界中でそうなのだ。

どうして、人間だけが争いをやめない？

他の哺乳類は・・・無駄な争いなどしないのに。

特に水中哺乳類は・・・決して無駄な争いはしない。群れの子をみんなで守る。

人間にどうして、それができない。

守りすぎてもいけない・・・そういう親をモンスターペアレントと呼ばれる時代だ。

過保護と放任が間違った形で広まりつつある……この日本で、私の安住の地など……もはや近所が限界だ。

「死」

この響きに耐えられない。

軽々しく言わないで……命はたった一つしかないのに……同じ考え・同じ人間などいてはいけない……それはクローンだ。個性を間違った見方で……見ないで。

耐え切れなくなる……そんな日は絶対に起こさない。

私が死ねば……家族が悲しむ。それだけで……生きる意味はある。

だから……いがみあうのは……やめてくれ。

間違わないで（後書き）

私には・・・もうこれ以上は・・・書けない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6430c/>

まだ暗い道の途中

2010年10月9日11時19分発行